

音楽を形づくっている要素と自己のイメージとを関連付ける学習

—小学校学習指導要領 共通事項 聴き取ったことと感じ取ったこととの関わり
について考えることの実践を通して—

Studying the connection of the elements characterizing music with feeling and emotion: Realization of the common items for each activity “Studying to understand the combined listening to music and its feeling.” with the government curriculum guidelines.

飯泉正人(牛久市立向台小学校)

Masato Iizumi (Mukoudai Elementary School of Ushiku City)

第9次小学校学習指導要領では、音楽科の目標が「音楽的な見方・考え方」という言葉を使って示された。小学校学習指導要領解説音楽編は、「音楽的な見方・考え方とは『音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること』であると考えられる。」と述べている。

小学生の音楽の指導を行う上でこれらの事項は特に重要である。その楽曲がより興味深い、親しみの持てるものとなるからである。筆者は勤務する小学校にて、平成29年度から3年間第4学年の音楽の授業を担当することができた。教科書「小学生の音楽4」（教育芸術社）には、サンサーンス作曲の「白鳥」が教材曲として掲載されている。白鳥が優雅に水面を泳ぐ様子を実に巧みに音で表現した名曲である。いかにして、小学4年生にこの名曲を「形づくっている要素」を捉えさせ、この曲のよさや美しさを味わわせるか。どのような授業展開をし、どのような発問をすれば、児童らは、この曲の持つ「音楽を形づくっている要素」を聴き取り、捉え、自分の言葉として話したり記述したりすることができるのかということである。

(キーワード)

学習指導要領 音楽的な見方・考え方 音楽を形づくっている要素 共通事項 関連付け

1. 本研究の背景

(1) 学習指導要領

小学校学習指導要領（平成29年告示）音楽では、音楽科の目標が次の通りに示された。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成

することを旨とする。

「音楽的な見方・考え方」は、今回の改定から新たに加わった部分である。これについて、同解説では次のように述べている。

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉

え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること

このことは、例えば〔第3学年及び第4学年〕2内容〔共通事項〕では、ア「音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること。」というように示されている。目標に「表現及び鑑賞の活動を通して」と示されている通り、このような学習活動は表現のみならず鑑賞領域において行っていかなければならない。

(2) 本校の実態

筆者の勤務する公立小学校でも、音楽の授業で鑑賞領域の指導を行うが、児童が「どう聴けばよいかわからない。」「感じ取ることのみになってしまう。」「何を聴き取ったのかをうまく伝えられない。」という状態であったことから、課題や課題提示の仕方を工夫し、児童が「音楽を形づくっている要素」を聴き取り、それを感じ取ったことに関わりについて考える経験を多く積めるようにし、音楽を聴くことは楽しいと感じるような活動を試みてきた。

第4学年の「白鳥」の鑑賞では次のように課題提示していた。

- 曲名を知らせず聴かせ、感じ取った曲のイメージを記述する。
「この曲は、ある動物をイメージして作曲されています。その動物はなんだと思いますか。」
- それを感じ取った理由として、聴き取った音楽を形づくっている要素を記述することで、感じ取ったことと聴き取ったこととの関わりを考える。
「そう思った理由はなんですか。」

ところが、音楽を形づくっている要素（以下「要素」）を聴き取れなかったり、聴き取れているのに言葉にして記述できなかったりする児童が多かった。例えば、「魚だと思う」その理由は

「魚が泳いでいるような感じがしたから」というような記述をする児童である。

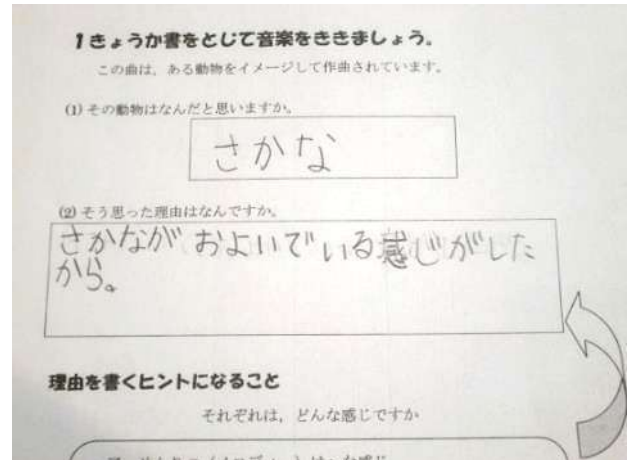


図1 要素を記述できなかったワークシート (H29)

(3) 聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて言語化する力

曲を聴いて「魚が泳いでいる」情景を思い浮かべられる感受性は大切である。児童らは、その感受性は持っていると思われる。しかし、その情景を思い浮かべさせたものが音楽の力であることに気づけた児童と気づけなかった児童では、楽曲への興味や、楽曲への価値の見出し方が全く変わってくる。

「この曲が表現しているものは魚が泳いでいる様子」であること、「そう感じた理由は、この音楽の最初の部分がゆらゆらゆれる水のようなだったから」などのように、聴き取った要素を、感じ取った自己のイメージなどと関連付けて考え、言語化して他人に発信できることが重要になってくる。要素の働きの大切さに気づき、要素がその楽曲のよさとして自分の中で価値付いていることになるからである。

そこで、楽曲を聴いて情景を思い描き、思い描いた根拠を「要素」と結び付けて考え、言語化し記述することができるようにするために有効な指導の方法を検証したいと考えた。

2. 研究の目標

次の学習目標を達成するために有効な指導の方

法を明らかにする。

曲を聴いて情景をイメージし、イメージした根拠を音楽を形づくっている要素と結び付けて考え、言語化し記述する。

3. 研究の方法

(1) 研究の対象

公立小学校第4学年における、二つの年度の実践を比較・考察し、目標に有効な指導の方法を検証する。

茨城県牛久市公立小学校
平成30年4月 第4学年 118名 (学年一斉授業)

同一の小学校
平成31年4月 第4学年 1組 2組 3組 計93名
(それぞれのクラス授業)

(2) 実践の題材

① 題材名

思いうかべながらきこう

② 教材楽曲

「白鳥」 サンサーンス作曲

「小学生の音楽4」(教育芸術社)より

教育芸術社の指導書の年間学習指導計画作成資料では10月に扱う教材となっているが、本校では、カリキュラムマネジメントの視点から、国語科の「こわれた千の楽器」(東京書籍)と関連を持たせるため4月にこの題材で実践を行っている。

③ 学習計画

第1時 (本時)

「なんの動物だと思いますか」

- ・音楽を形づくっている要素と自己のイメージとを関連付けて考える。

第2時

「サンサーンスの気持ちになって曲をきこう」

「羽生結弦選手の演技を見ながら曲をきこう」

- ・作曲者の意図を感じ取りながら音楽を形づく

くっている要素を聴き取る、曲全体のよさを味わう。

- ・演奏者の姿を映像で見ながら曲全体のよさを味わう
- ・フィギュアスケートの演技と共に編曲作品を味わう(「白鳥」が声楽曲に編曲された「星降る夜」をフィギュアスケートで表現した羽生結弦選手の演技を味わう)

第3時

『こわれた千の楽器』に登場する楽器の音色を聴こう」

- ・国語科教材の「こわれた千の楽器」に登場するチェロ以外の楽器について独奏曲などを映像と共に味わう。

(3) 授業 (本時) の実践

① 自己のイメージの言語化

曲を聴いて思い浮かべる自己のイメージや情景などを率直に、しかしできる限り具体的に言語化する。本校の第4学年児童は、聴いた楽曲の特徴を、これまで聴いたことのある楽曲との共通点や、直感的に想像したものや情景、テレビなどのメディアとの関連性などに見出そうとする傾向にある。それを、曲を聴いた瞬間の自己のイメージや情景として、できる限り具体的に言語化させることを学びの出発点とする。このことが、次の音楽を形づくっている要素を言語化する段階において、「なぜそう感じたのだろう」というように、そう感じさせている要素や要素の働きに着目するきっかけとするためである。

② 音楽を形づくっている要素の言語化

自己のイメージについて、「なぜそう感じたのだろう」というように児童に考えさせ、自分にそのようなイメージをさせた要因を要素や要素の働きに見出し言語化する。①の記述が具体的になっていればいるほど、多くの要素に目を(耳を)向けやすくなり、具体的に記述したり、多くの要素を取り上げて書いたりすることができる。

ここが、本研究の中核をなすところである。

③課題提示

課題提示に際しては次の点に留意した。

ア 与える情報の精選

課題を提示するにあたって、楽曲についての情報は最小限にとどめるようにした。曲名を伏せることはもちろん、聴く部分も初めの約30秒間のみとした。児童どうしが同じ視点で要素を聴き取ったり、話し合ったりすることができるようにするためである。「白鳥」を約2分30秒の全曲を聴けば、冒頭の部分に着目する児童や、リタルダンドして曲が終わるところに着目する児童がそれぞれの視点で意見を述べ合うかも知れない。しかし、限られた時間で、この楽曲が全体を通して表現しているものについて、同じ目線で自己のイメージを持ち、関連付ける要素を聴き取るには、聴く部分を約30秒間に焦点化する必要があると考える。

イ 聴く目的の明確化

児童どうしが同じ視点で要素を聴き取ったり、話し合ったりすることができるようにするために、今は何を目的に聴くのかを常に明確にした。自由な言語化を促すためにも、同じ目的や方向性で学習できるようにした。

ウ ワークシートの工夫

口頭での発問と、ワークシートに印刷する発問を同じ言葉にするようにし、児童が常に、「今は何を聴いているのか」や「今は何のために聴いているのか」を確認しやすくした。また、自由な言語で記述しやすくなるようワークシートのレイアウトもできる限りシンプルにした。

④対話的な言語活動

アクティブラーニングの視点に則り、対話的で深い学びを求めていくことは、本実践にとって非常に重要である。自己のイメージ、そして

音楽を形づくっている要素やその働きについて言語化する活動であるので、言語化に他者との対話は有効であると考えられるからである。児童どうし、児童と教師が大いに対話を楽しみ、多くの言葉のやりとりをすることがこの実践の本質と考える。また、その結果として自分の考えをより具体的に言語化したり、自分の想像の方向性を確定させたりしながらワークシートにも多くの言葉が記述されると考える。

牛久市は、アクティブラーニングの視点での指導法を早い時期から推奨しており、児童らもグループや全体で対話的に授業を進めることに抵抗なく取り組めるようになっている。

(4)②の記述についての分類・集計

②の記述について要素に触れて書かれており、かつ発問①との関連が認められるものを判定し、その数を集計する。また、それら要素の種類を分類・集計する。図2から図6は、それぞれテンポ、音高、旋律、音色、強弱に分類した平成30年度のワークシートである。

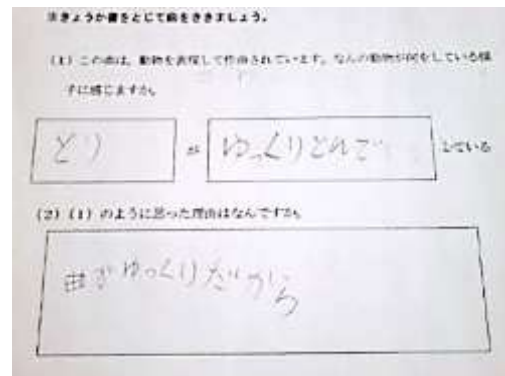


図2 テンポについて記述したワークシート (H30)

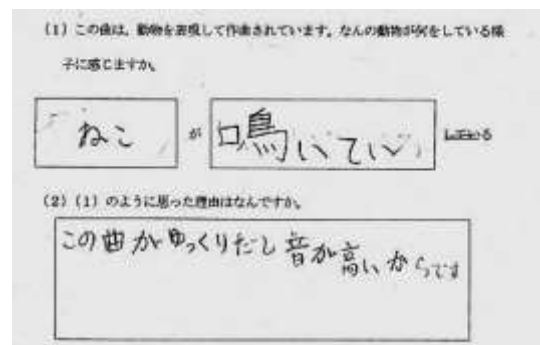


図3 音高について記述したワークシート (H30)

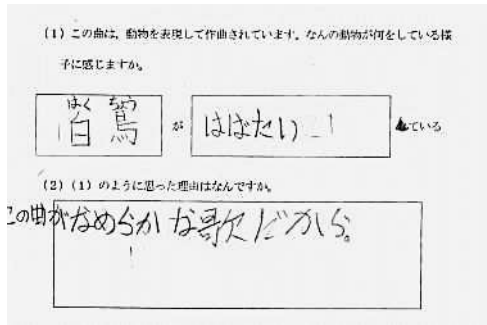


図4 旋律について記述したワークシート (H30)

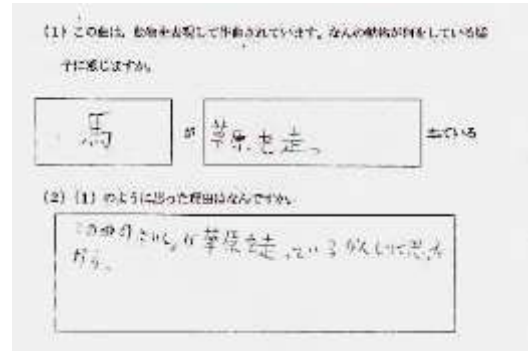


図7 リズムについて記述したワークシート (H30)

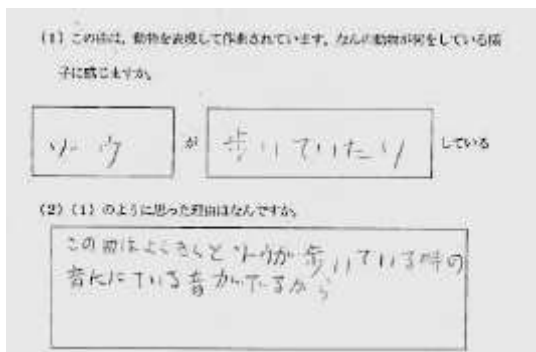


図5 音色について記述したワークシート (H30)

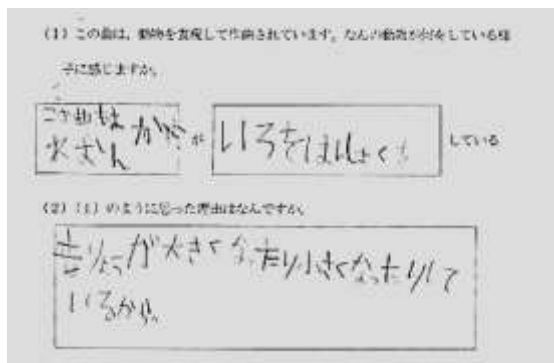


図6 強弱について記述したワークシート (H30)

図8のワークシートは「ゆっくり」「やさしい」「ゆらゆら」の3つの言葉について要素を記述したものと判定する。このうち「ゆっくり」はテンポに、「やさしい」は音色に、「ゆらゆら」はリズムに分類する。

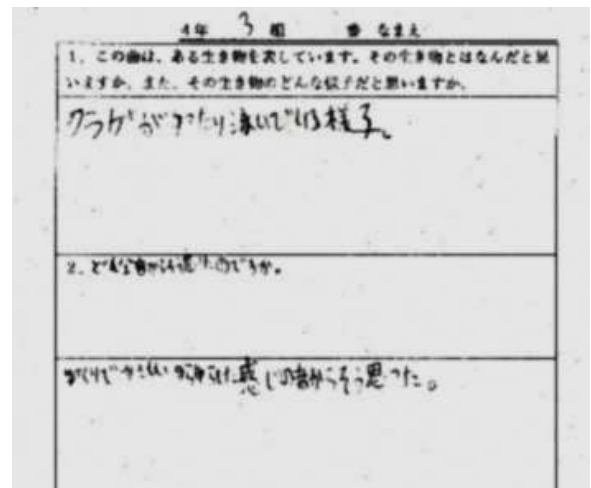


図8 テンポ、音色、リズムについて記述したワークシート(H31)

なお、判定・分類の際は、授業での児童どうしや児童と教師の対話などを十分参考にし、学習活動全体での文脈で考えるよう留意する。例えば図7のワークシートは、一見「要素」を特定する言葉は見当たらないようであるが、児童の言う「さいしょ」は前奏のピアノの16分音符アルペジオを指していると判断できる。よって、この児童は要素を一つ記述できたと集計し、その要素はリズムに分類されたとした。

4. 実践の比較

ここから、平成30年度と平成31年度の実践とを対比させ掲載する。

(1) 授業の環境など

筆者は平成30年度において4学年の担任であったため、4学級(計118名)のうち担任する学級のみ音楽の授業を行っていた。この年の実践は、国語科の「こわれた千の楽器」との関連づけのために、筆者が特別に学年授業を行ったも

のである。それに対して、平成31年度は、筆者が全学級(4学年3学級)の音楽の授業を担当することになったときの実践である。そのためこのような環境の差異が生じた。

表1 2つの年度の環境の差異

	平成30年度	平成31年度
授業形態	学年授業	通常授業 (学級ごと)
この活動にかけた時間	20分	40分
体勢	大型教室の床に座って	音楽室にて机、椅子を使用
少人数の話し合い	近くの友達	4人のグループ

(2) 課題の提示

①平成30年度

(1)この曲は、動物を表現して作曲されています。なんの動物が何をしている様子に感じますか。

(2)(1)のように思った理由はなんですか。
(以下口頭と板書で)
「書くときは、次のどれかの書き出しで書きましょう。」

ア 「この曲は・・・」
イ 「この曲が・・・」
ウ 「この曲の・・・」
エ 「この曲を・・・」

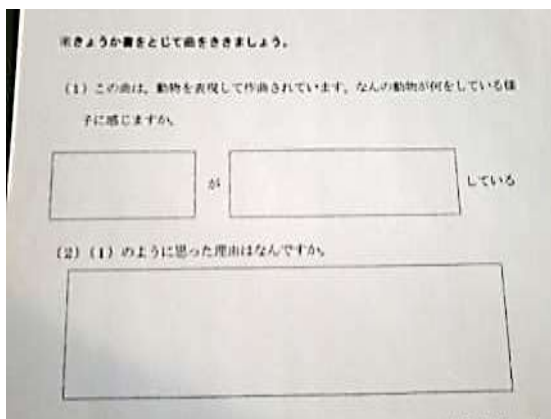


図9 H30年度のワークシート

②平成31年度

1. この曲は、ある生き物を表しています。その生き物とはなんだと思いますか。また、その生き物のどんな様子だと思いますか。

2. どの音からそう思ったのですか。(発問したタイミングで記入できるように枠を用意しておく)

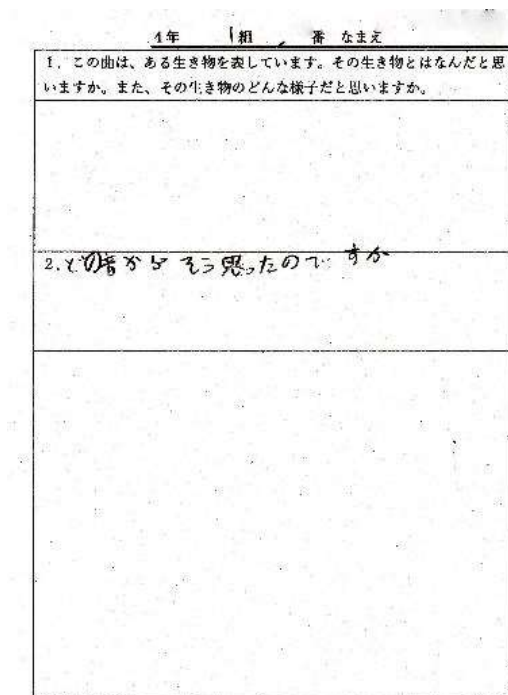


図10 H31年度のワークシート

(3) 音楽を形づくっている要素と判定できた言葉の数

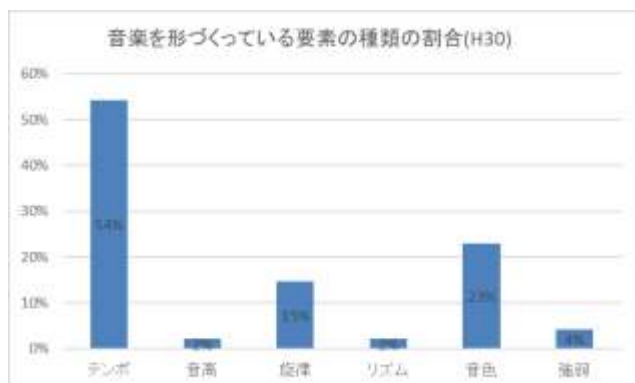
表2 2つの年度の要素記述率の比較

	平成30年度	平成31年度
回答児童数	107名	86名
判定できた要素の総数	96	130
一人当たりが記述できた要素数	0.89	1.51

(4) 音楽を形づくっている要素の種類ごとの割合

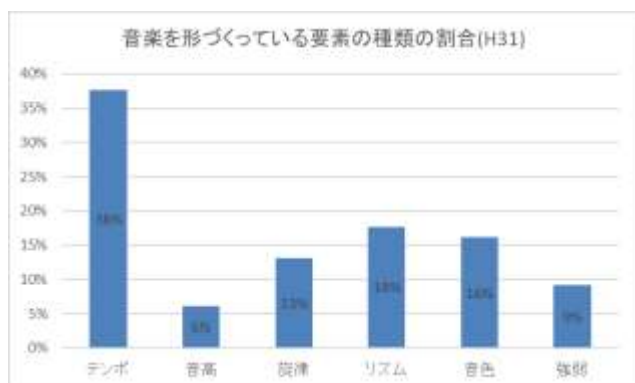
グラフ1

音楽を形づくっている要素の種類割合 (H30)



グラフ2

音楽を形づくっている要素の種類割合 (H31)



5 考察

(1) 結果の差について

① 音楽を形づくっている要素の数

筆者が最も着目した点は、この、ワークシートに記述された要素の数の差であった。一人当たりが書けた要素の数は、H30年度が0.89であったのに対し、H31年度は1.51であった。おおまかな見方でこの結果を見ると、H30年度は、約9割の児童は一人1個ずつ要素に関する言葉を書くことができたことになる。それに対し、H31年度は、全員が1個は要素に関する言葉を書くことができ、更に2個目を書けた児童が約半数いたということになる。これは、自分がイメージしたことの根拠を音楽を形づくっている要素とより強く関連付けて考えることができたと考えられる。

つまり、H30年度の実践よりもH31年度の実践の方が、「曲を聴いて情景をイメージし、イメージした根拠を音楽を形づくっている要素と結び付けて考え、言語化し記述する。」という目標に近づくことができたと判断することができる。

② 音楽を形づくっている要素の種類割合

要素の種類割合にも、2つの年度の差に興味深い結果が出た。H30年度を見ると半数以上がテンポに関する言葉となっていた。①の数字と合わせ大まかに見るとこう言える。要素について書けた9割の児童は、大体一人1個ずつ書くことができた。多い順に、その5割半がテンポ、2割が音色、次いで旋律、強弱と別れた。

これに対しH31年度を①の数字と合わせ大まかに見ると、全員が1個または2個の要素について書くことができたということになる。実際、2個書けた児童は、その組み合わせ方はテンポと他のもう一つというケースが多かった。

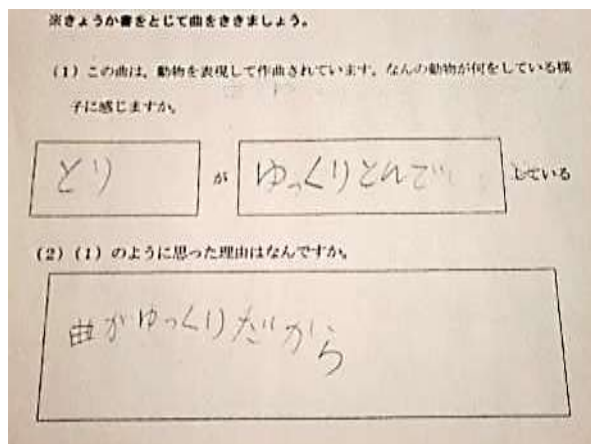


図 11 テンポについて要素を記述したワークシート (H30)

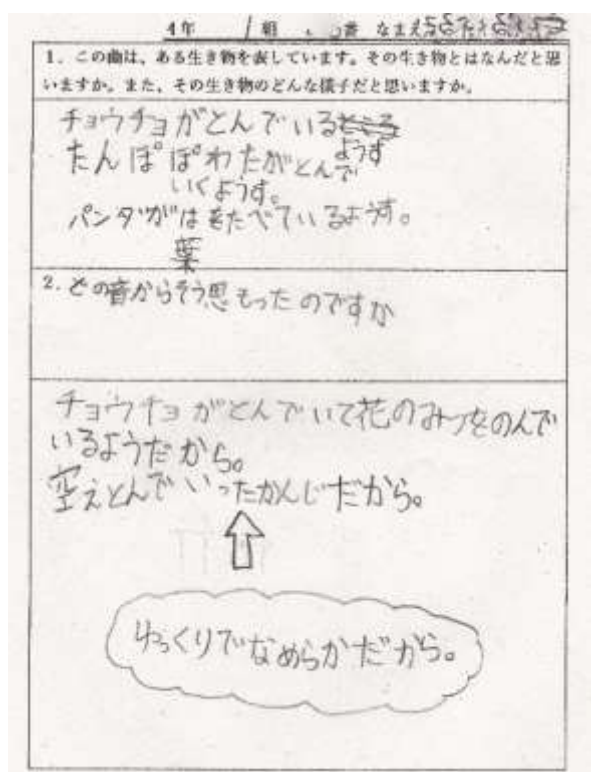


図 12 テンポと旋律について要素を記述したワークシート (H31)

(2) 差についての考察

①活動環境と活動時間

H30 年度の実践は普通教室の 2 倍の広さがある大型教室で行った。そこに、181 人（在籍数）の 4 年生全員が床に体育座りをしての学年授業であった。この活動にかけた時間は約 20 分であ

った。それに対し、H31 年度は学級ごとに通常の音楽の授業の形態で行った。本校の音楽室には机と椅子があるのでそれを使用した。この活動にかけた時間は約 40 分である。曲を聴いて要素を記述するためには、十分な時間と、記述する環境が必要だと言える。

②音楽を形づくっている要素を記述させる発問

結果の差異は、活動環境と活動時間によるものもあった。しかし、20 分での実践の時も 40 分での実践の時も、児童が盛んに記述する時間は発問後の約 3 分間であった。このことを考えると、差を生じさせた要因は、活動環境と活動時間よりも発問に大きな要因があるということが言える。

要素を記述させる発問は、H30 年度は次の通りであった。

(2) (1) のように思った理由はなんですか。
 (以下口頭と板書で)
 「書くときは、次のどれかの書き出しで書きましょう。」
 ア 「この曲は・・・」
 イ 「この曲が・・・」
 ウ 「この曲の・・・」
 エ 「この曲を・・・」

この発問は、それまでの「魚が泳いでいる感じがするから」のような、要素に触れることができない状況をなくし、自己のイメージの源を曲の中に求めるようにさせるためであった。しかし、一人当たりが記述できた要素の数は 0.89 であった。約 9 割である。残る 1 割の児童には、教師側の意図は伝わらなかったと言える。児童にとっては、曲の何を聴いていいのかが、聴こえたものをどう書いていいのかがわかりづらかった面があったと考えられる。

H31 年度の要素を記述させる発問は次のようにした。

「どの音からそう思ったのですか。」
 これはEテレの教育番組「音楽ブラボー」で

使われていた発問の言葉である。音楽ブラボーでは、同じ「白鳥」を鑑賞曲として取り扱っている。「なんの動物だと思うか。」という問いかけで番組が始まり、「その動物が何をしている様子か。」というように、最初の発問も次の発問も本実践と偶然同じであった。しかし、音楽ブラボーはこの先が違っていた。それがこの「どの音からそう思ったのか。」であった。

この発問を取り入れたことで、本校児童らは「どの音？」という疑問符の元に曲を聴くことができ、音楽の進行速度が遅いということに加えて、「この部分のこんな音が」というように具体的な音に触れて要素を挙げられるようになったと考える。また、「さいしょの音・・・」や「さいしょの〇秒が・・・」など、曲の進行による変化をとらえて述べる回答や、複数種類の「要素」をとらえられた児童が多かったことから、この発問がより注意深く曲を聴くことを促したとわかる。授業者の視点からは、目標に迫るために最も有効であった手立ては、この発問の仕方であったように思う。

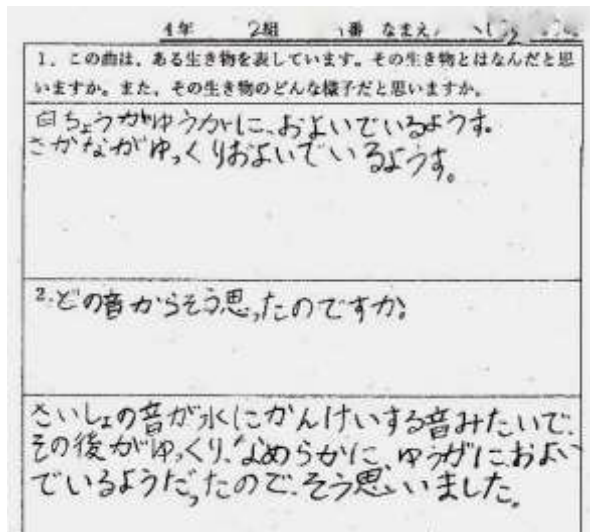


図13 「さいしょの」「その後が」の記述があるワークシート

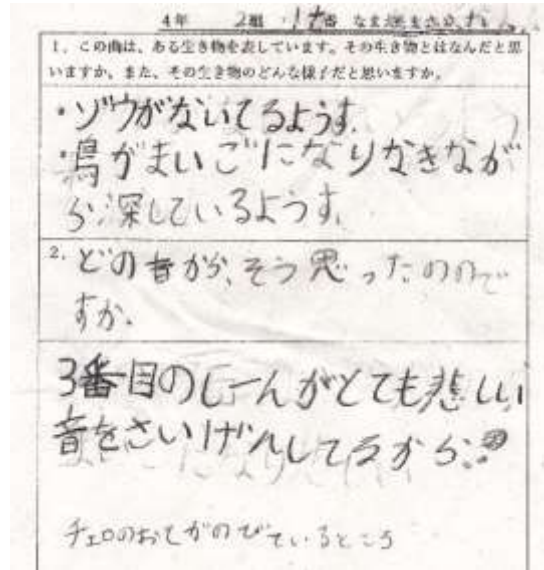


図14 「3番目のシーン」の記述があるワークシート

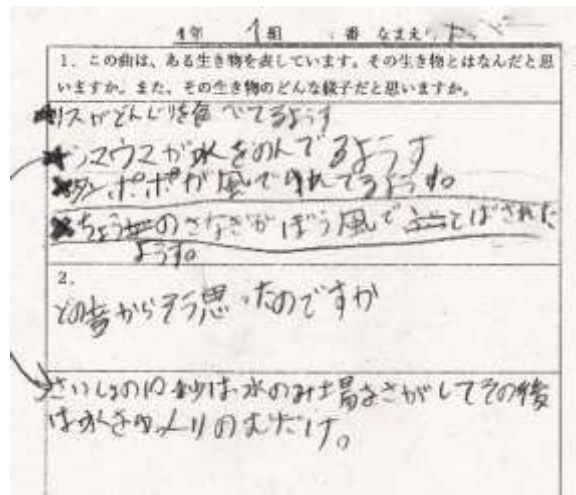


図15 「さいしょの10秒」の記述があるワークシート

③対話的な言語活動について

H30年度の話し合いは、「近くの友達と話し合ってください」という指示で行った。それに対し、H31年度は、4人ずつのグループ隊形にし、十分な時間を話し合いに充てられた。自己のイメージや音楽を形づくっている要素、またはその働きについて言語化する活動であるので、言語化するために他者との対話は有効であると考えられる。やはり、児童どうしや児童と教師が大いに対話を楽しみ、多くの言葉のやりとりを

することがこの実践の本質であると考え。そうすることによって、自分の考えをより具体的に言語化したり、自分の想像の方向性を確定させたりしながらワークシートにも多くの言葉が記述されたと考えられる。

④部分聴取

③で述べたように、H31年度の実践では、より対話を多く持たせることができた。また、授業の展開上、部分聴取が可能になった。前奏の1小節のみを繰り返しCDで再生するなどの方法である。部分聴取は、イメージと音楽を形づくっている要素との結び付けに非常に大変有効であったと考える。それに加えて、H31年度の児童は聴き方が能動的であった。曲を時間的経過で追って聴き、「最初の〇〇の音が」とか「2番目のシーンが」などと、自分が伝えたい要素が曲の進行上のどの部分にあったかまでを訴える児童もいたのである。それにより、授業の自然な流れの中で、指導者がピアノ演奏で、前奏のピアノの右手部分や左手部分、チェロが演奏する主旋律部分などをそれぞれ単音で弾き聴かせることになっていったのである。「どの音から？」という発問が、児童の聴き方を能動的にし、対話的な活動をより活発にさせ、部分聴取の必然性が生まれたという連鎖であった。

(3)今後の課題

①有効な指導法の検証のために

H31年度の実践は、次の4つの観点においてH30年度の実践からの改善を行った。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 活動環境と活動時間 ② 音楽を形づくっている要素を記述させる発問 ③ 対話的な言語活動 ④ 部分聴取 |
|---|

4つの観点の改善により目標に近づくことができたわけである。授業者の振り返りから、最

も有効であったものなど述べることはできるが、客観的に数字等で表すことができない。これを研究として続けるならば、どの手立てによってどれだけの成果があったかという視点で整理して研究していくことが必要であると考え。

②要素の種類がわかる力

今回の研究は小学4年生を対象とした。指導目標は「曲を聴いて情景をイメージし、イメージした根拠を音楽を形づくっている要素と結び付けて考え、言語化し記述する。」ことであった。それは例えば、図16のような児童を図17のような状態までにすることであった。小学4年生において、今回の指導目標としては適切であったと考える。

児童は、今後高学年になるにあたって、徐々に要素の種類を特定できる力（「曲の速さが〇〇い」「音の強弱が〇〇い」など）を育てていく必要があると考える。つまり、図17のような状態から図18のような状態にしていくことである。なぜならば、その力は中学校での音楽の学習に大いに生きると考えるからである。例えば、中学校において、自分たちの力で学級の合唱を作り上げていくような活動をする場合、どのような要素がどのような働きがあるというようなことを理解し、要素を使いこなしていける力が必要であろう。

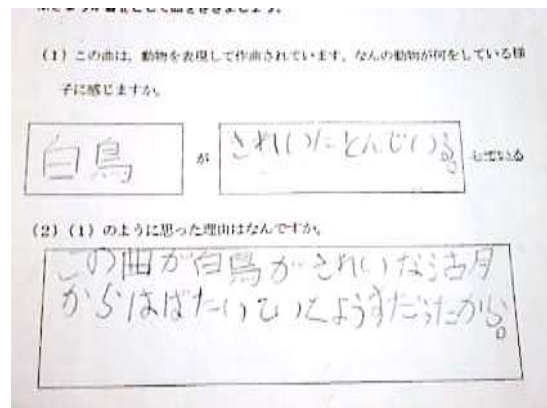


図16 要素が記述できていないワークシート

(1) この曲は、動物を表現して作曲されています。なんの動物が何をしている様子に感じますか。

白鳥 が 優雅に泳いでいる

(2) (1) のように思った理由は何ですか。

なつかしい曲だから

図 17 要素の記述があるワークシート

(1) この曲は、動物を表現して作曲されています。なんの動物が何をしている様子に感じますか。

ねこ が ゆっくり歩いている

(2) (1) のように思った理由は何ですか。

この曲のはやさが
ねこが歩いているはやさ
みたいだから。

図 18 要素の種類を特定してその働きを記述したワークシート

中学校に長く勤務していた筆者は、その発達段階を理解しないまま小学4年生担任となり、直後の4月で「白鳥」の授業を行った（平成29年度）。その際、4年生に要素の種類を特定させ、その働きを書かせようとしていたのである。それが図1のワークシートを使ったときであった。翌年のH30年度まで、要素の種類まで特定させたいという意図があった。

しかし、要素の種類を特定できるようになるには、数多く要素を聴き取る経験が必要である。それを経て、要素には種類があることや、要素の種類によって働きが変わってくることに気づくのである。小学校3・4学年は数多く聴き取る経験を積む段階で、種類は特定できなくても要素に数多く触れ親しむことの方が重要であると考えた。音楽ブラボアの「どの音？」という発問は、筆者にそのことを気づかせてくれ

たとも言える。そのように考えて行った実践がH31年度であった。

小学5・6年生において要素の種類がわかる児童に育て、中学生において要素の種類までを使いこなせる力を育てる。そうすることによって、音楽科は義務教育9年間で実り豊かな教育活動を実現することができると思う。

〈文献〉

文部科学省：『小学校学習指導要領（平成29年告示）』

文部科学省：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説』

教育芸術社：小学生の音楽4

教育芸術社：小学生の音楽4 研究編

東京書籍：新編 新しい国語 四上

東京書籍：新編 新しい国語 教師用指導書 四上 研究編